

■ 惜 別 本稿はご逝去日の順に掲載致します。

四回生 森山 嘉根様(名誉会員) 17・04・12没

ご令息の宏紀様よりご連絡を頂きました。

本会の最高齢者として「名簿」の第1ページを飾っておられました。総会にはご出席頂く機会がなく、誠に残念です。

二十九回生 細見 正様(休会中) 17・02・02没

姉上の奥田洋子様よりご連絡を頂きました。

初期の総会にはご出席頂いておりましたが、大阪へ戻られる事となり休会されました。スキューバダイビングの免許を持たれていたのに、プールで遊泳中に体調が悪くなり、残念ながらそのまま入院先で亡くなりました。

二十七回生 五十嵐 孝夫様 18・05・15没

奥様の和賀子様よりご連絡を頂きました。難病にかかれてお一人での外出が困難となり、最近

と孝夫ちゃん夫婦のご両親の実家はこの公園へ行く下小路坂?の通りにあるとのことであった。帰ったら 残暑見舞で「鳥海山から酒田港や影鳥海まで見たぞ」と報告してやろうと 浮き浮きしながら下山していたのだった。

ところがなんと皮肉なことに 帰宅した翌日孝夫ちゃんの奥さんからこの5月15日に亡くなられたとの電話連絡があった。幼稚園以来の友人五十嵐孝夫享年74歳のご逝去の報告だった。会誌「千里山」が発行されるまで孝夫ちゃんが皆に知らせるなと言うことだったらしい。皆に要らぬ心配をさせないと言う彼らしい配慮だったのだろう。

孝夫ちゃんとは幼稚園で二年間と小学生低学年の三年間同じクラスになったのに過ぎない。彼は中学生になった時、それもお父さんが気に入った千里山の安達工務店に建てさせた東京の家に引っ越した。

従って、一緒に遊んだ覚えは数少ない。幼稚園の時、絵画と一緒に習っていた。彼に言わせると彼のお母さんが僕の絵をほめていたとのこと、比較的大きくなくてもその話が出てくる。僕の家から彼の家まで400mも離れていない。彼の近所には男の子が少なく、いつも、例えば、ある夏の夕暮れ、お尻に懐中電灯を突っ込んで、ついたり消したりして走り回り「蛍や」と女の子を笑わせていた。お父さんも私の父より若か

は総会にもご出席頂けませんでした。総会の出欠連絡でご逝去を知り誠に残念でした。

編集担当(24奥田)は姉上の和子さんと同級で時々お宅に遊びに行き、幼稚園児だった孝夫様とも顔を合わせています。ヤンチャ坊主とはほど遠い溫和しい口数の少ない子だったと記憶しております。総会でお目に掛かった時「覚えてる？」と聞きましたが70年前の事を覚えてられる筈はありませんでした。

孝夫ちゃんの思い出

二十七回生 林 裕三

私は昨年夏憧れていた山形県の鳥海山を登った。私が現役時代 フラットパネルの搬送設備の据え付けに従事しているとき、良く鶴岡や酒田に行った。そのとき 楽しめたのは鳥海山や月山の美しさだった。

それがその日の前日頂上を極めたのだ。夕日が真っ赤に染められた外輪山をその翌日、酒田港などの眺望を楽しみながら下山して行った。その日の朝出発する前に 背後から当る日の出がなんと日本海側の雲海に鳥海山の影が現れたのだ。「影鳥海」と言うのだそう。何回も来ている人曰く、なかなか見られないとのことであった。酒田港が手に取るように見られる

ったのか、郊外学園の奥のところの竹藪に忽然とプラコンと滑り台がある遊園地が現れた時、一緒に連れて行ってくださり写真を撮って貰ったことがある。彼は小さいころから背が高く痩せていた。これはご両親からの遺伝であろう。子供の時は気が付かなかったが、所謂イケメンで、高校生、大学生時代は良く持っていたと想像する。

語学学習の為もあったかも知れないが、田園調布辺りの外国の女学生と付き合っていたとも聞く。学生時代に千里山の井沢徳のゴルフ場で一度遊んだことがあったが、ゴルフ場の女事務員とパターの練習などツィショットで写真を撮らされた思い出がある。

高校大学時代に用賀の彼の家に遊びに行った。お父さんが色々親切にしてください、馬事公苑や新宿御苑を案内するよう彼に命じていた。そう言えば、高校のクラブの先輩が新宿の中華料理屋に勤めていて、孝夫ちゃんに案内してもらったことがある。就職してからも 東京へ出張があると良く用賀の家に寄った。孝夫ちゃん夫婦は結婚したとき所謂二世帯住宅を建て、二階に若い夫婦が住んでいた。僕が泊りに行くと、ご両親が階段を上って来られ、時間が無いときはご挨拶だけで、時間があると雑談されて下りて行かれた。あるとき、私の出発が早かったのか、お父さんが用賀の駅の途中まで「顔を見たかった」と追いかけて来られたことがあった。ありがたい子煩悩なご両親だった。

彼が大阪に単身赴任されていいたとき、私が大阪へ出張の折、何回も梅田でご馳走になった。彼は口が肥えていたから、美味しいところを案内してくれた。彼が北海道千歳？に赴任した時、猟銃を楽しんでいた。後年知ったのだが、彼の家の近所に鉄工会社の社長さんの家があり、その社長さんに鉄砲のことを教えて貰ったらしい。その娘さんに確認すると「そんな話始めて聞いた。兄弟に男の子がいなかったから、近所の男の子を可愛がっていたのでしょう」という。彼はどんな大人にも男女問わず好かれていたようだった。私自身彼の会社の設備会社に私の会社の電磁製品を使つて頂いていた。色々親切にご指導いただいた。彼がそのような指示をしていたのかわからないが、何回も言うが誰からも好かれる奴だった。体を悪くされてからも、ご夫婦で世田谷の有名な家を案内して貰ったことがあった。彼のその時の口は達者であった。でも奥さんのご苦労は言い表せない。今年の夏で2回目のお盆を迎えた。良い奴を失くした。ご冥福を祈る

五十嵐君への追悼文

二十七日回生 萩原 直大

私と五十嵐君とは幼稚園では多分一緒のクラスだったと思うのですが、千二小では一度も同じクラスになったこと

がありません。でも確か凄く足が速かったように記憶しております。

五十嵐君と親しくなったのは、お互いが千里山会に出席するようになってからで、我が学年は会の総会以外に時折学年会を催しております。その時は必ず参加してくれ、笑いをばらまいてくれました。あのソフトな雰囲気似合わず、結構辛辣、ズバズバ言いたいことを言ってくれていました。

パーキンソン病を患つてからは、「体がフラックので、駅のプラットホームは怖い」と、電車に乗つての外出は控えてしまいました。当然、その中に千里山会総会も含まれません。

そこで時折、高見君と2人で、同期仲間数人で、彼の自宅にお邪魔させてもらいました。五十嵐君は医者からは出来るだけ散歩をするように勧められていたそうです。ただ、歩いているうちにどうしても体のバランスが崩れ、道路脇に崩れてしまうことがシバシバとか。

でもさすが五十嵐君

「俺なら、へ垂れ込んでもなく、いつも若い女性が助けられるねん」と、奥さんの前でぬけぬけと。

まあ確かに24回生のお姉さんである河合和子さん共々、美形ではあるが。天国ではあまり天女をからかわないようにネ！

十三回生 仲辻 章様(名誉会員) 18・06・18没

奥様の雅子様よりご連絡を頂きました。総会の出欠連絡でご逝去を知り誠に残念でした。

会誌17号には「尾高一郎先生の思い出」を書いておられます。又、会誌18号には前年の千里山会総会でされた昔の千里山についてのスピーチ「追憶」が掲載されております。

「お別れの言葉」

十三回生 小川(伊達)雅子

昨日6月11日に十五回生山本平八郎兄からの電話で私の同級生仲辻章兄の訃報を知らされ体中の力が抜けてしまいました。お互いに昭和四年生まれ、死んでもおかしくは無い年令なのですが、今年の始めに友人のお葬式に千里寺で会い、相変わらずニコヤカにおだやかに大変お元氣とお見受けしたところだったので、

ご家庭のこと迄くわしくは知りませんが、千里山の駅から噴水までの右側、ブリキ屋さん、散髪屋さん(銀行はまだ無かった)の上で、昔母上と姉上が牛乳屋さんをしてらした。体格も良くスポーツ万能。勉学にも秀でた、イケ面の私の自慢の幼友達。学校の成績も良く職業として、あこがれの弁護士となり、

梅田に立派な事務所を構え良き人生を送られたと思えます。

奥様とあと取りの坊ちゃんがお淋しいこと、思いますが、これは世の常の順番通り、上からの章君の優しいお見守りをお祈りして、お別れの結びの言葉といたしたいと筆を取りました。以上

思い出

十四回生 三分一 克美

仲辻さんと2014年総会の時同席になり、懐かしい昔話を沢山聞きました。その中で君に会つたら話そうと思つた事があるのだが思い出せない、と悔しがつておられたのを思い出します。私も仲辻さんのご近所には親しくして頂いた方々、疋田さん、矢口さん、宇野さん、三輪さん、倉田さん、永田さん、武蔵さんが居られたのに、消息を聴き損なつたので次回お会いした時に伺うつもりでしたのに残念です。ここからお悔やみ申し上げます。

仲辻さんへの追悼文

二十七日回生 萩原 直大

仲辻さんと私では14も歳が違うので、私には仲辻さんの記憶はありません。ただ平成26年第18回千里山会

総会にご出席いただき、さらに『追憶』なる挨拶をして頂きました。戦前の千里山の数々の思い出。私の始めて聞く話ばかりでした。

懇親会に移り席を乱れての雑談中、突如、仲辻さんから、「君のお祖父さん、お父さんをよく知ってるよ」と声を掛けていただき、目を白黒させたのを覚えていません。

父は昭和17年、34歳の時に千里山に移り住み、以来、平成6年に86歳直前に亡くなるまでの52年間を千里山で暮らしました。ですから仲辻さんに知って頂いていてもおかしくありませんが、明治8年生まれ、江戸っ子2代目の母方祖父をご存知頂いていたとは・・・。

祖父は旧制中学で数学の教師をしていて、現役時代は東京の神田で暮らしていました。私より68上で、戦争中・戦後はもう現役を退き、鉄道学校の教師をしていました。その関係で国鉄の鉄道運賃の割引があったようです。それを利用してしばしば東京から千里山の自分の娘（私の母）のところによくやって来たのです。ちょうど今の私の歳（76）ぐらいでした。

日頃はラジオで広沢寅蔵の講談を聞き、外地で戦死した2人の息子がもしかして舞鶴に引揚げてくるかも知れないと、引揚者名簿を読み上げるラジオを熱心に聞いていました。

それらに飽きると、専ら一人でヨレヨレの和服に下駄履きで道路ラジオ体操をし、その後を決まって

二十六回生 細見 彰様(会友) 18・09・09没

姉上の奥田洋子様よりご連絡を頂きました。

筑波大学教授として在勤中は欠かさず総会にご出席頂いております。その後も東京での学会などにご出席の際には、同期の方々と交流を続けて居られました。

回想録 細見さんを偲んで

二十六回生 児玉(服部)絢子

昨年9月9日夜9時半過ぎに奥田さんから、私と同じ二十六回生の細見彰さんご逝去のメールが入り目を疑いました。細見さんとは小、中、高校と同じでした。

筑波大学教授の細見さんはお知り合いには偉い方が沢山おられたと思いますが千里山会でお会いするようになり私達二十六回生とも親しくお付き合いして頂くようになりました。

その上つくばは私の住んでいる柏市とは比較的近いこともあり土日によく紅葉が見事な学園大通りをドライブがてら娘を連れ、ゆりのき通りから時には大学構内もお訪ねしましたし、ランチや京都から奥様が出ていられていた時は筑波大生がアルバイトをしているカフェで一緒にお茶もしました。

千里山駅まで散歩していました。どうやら帰りには必ず仲辻さんのところに寄り、牛乳を1本飲み、お喋りをして帰っていたようです。

恐らく当時、牛乳配達をしながら司法試験の勉強に励まれていたであろう仲辻さんにとっては、落語でも聞く思いで話のお相手をして下さったのでしよう。

お相手をして頂き、有難うございました。また向こうでもお相手、よろしく頼みます。

関東圏に住む高校の同窓生女性数人でお邪魔したこともありました。

教室にも入れて頂き教授の椅子に掛けて写真撮って頂いたりもしました。そんな時も化学の実験経過は休みなく変化するのでと教室と実験ガラス器具が無数に並ぶ実験室を何度も往復していました。

以前東北大におられた時、宮城沖地震に見舞われ沢山のガラス器具が破損し、その数を国に報告しなければならなかったとかのお話もされていました。

千里山会では柿崎さんが恒例の特別講演の講師を探しておられましたので私は迷わず細見さんに訊いてみましたが、ご本人は「千里山会にはまだまだ沢山立派な方がおられるから」と言われ柿崎さんにお伝えするに到りませんでした。

その何年か後に日本化学賞を受賞され、出席者九十人越え千里山会全盛期の二〇〇三年に講師を引き受けられ 私達にも分かり易く「物質(分子)を創造し生活を豊かにする化学」というタイトルの講演をされました(会誌7号14ページ17ページ)が大勢の前でお話されるのは流石に慣れておられると感心しました。

講演後は奥田さんから仰せつかって花束をお渡ししたことが自己満足かも知れませんが名誉な事として

懐かしく記憶に残っています。

二〇〇七年秋には同期の川原さんに新幹線やホテルの手配をして頂き二十六回生女性五人で京都へ紅葉見物の旅行をしました。

京都散策は当時既につくばから京都に戻られていた細見さんに計画を立てて頂き、お寺や神社の歴史は勿論辺りの樹々の事まで詳しく解説して頂きました。

別ページの26川原一恵さんのご寄稿「旧友との京めぐり（細見さんを偲ぶ）」も併せてお読み下さい。（編集部）

京都に戻られる決心をされた大きな要因になったのは一歳にも満たないお孫さんを亡くされたからとお聞きしていましたのでそのお孫さんのお墓参りもさせて頂きました。

細見さん作成の細かいタイムスケジュール通り鴨川を橋を歩いてではなく「飛び石」で対岸に渡ったり京都大学内の喫茶室でお茶をしたりと気さくでお茶目な細見さんならではの企画で色々な体験をさせて頂きました。

夜は細見さん御用達の料亭で豪華なお食事を頂いた後ご自宅にもお招き頂きましたが、直ぐ目に付く場所に二十六回生女性全員で細見さんがつくばを離れられる時にお贈りした光触媒のランの鉢が置いてあり、

細見さんや奥様の私達に対するお気遣いが窺われました。

三年前の春からは名古屋の娘さんのところのお孫さん（亡くなったお孫さんのお姉ちゃん）が大阪の中高一貫校に入られて京都のご自宅から通学させておられました。若い女の子を預かるのは責任もあるけど若さを保てる要因になると言われ、張り合いを感じておられました。お孫さんの卒業を待たずに旅立たれたことはお気の毒でなりません。

細見さんは「上京」という言葉は使われず、東京の大学へお仕事で来られる時は「江戸に下る」から集まりましょう、私達が京都へ行くのは、「上洛」の折には是非知らせて下さい。でした。

メールや電話では連絡を取り合っていました。直接お会いしたのは「江戸に下られ」お茶の水ガーデンパレスでランチの後長時間歓談した一昨年の八月が最後になりました。「上洛」してもお目に掛かれなくなっていました。

初めの方で書きました私の娘は去年の秋から夫の転勤でつくば市に移り住んでいます。細見さんにもうそのことをお伝えすることも出来なくなりました。

私達に沢山お思い出を遺していただいた細見さんのご冥福をお祈りいたします。